

賞書

満州佐伯村おぼえ書 三

第十次・昌図佐伯開拓団小史

会員 矢野徳弥

四 入植準備

(現地訓練)

幹部三名はハルビンの幹部訓練所で、関係法規や、現地の地誌等について講義をうける一方、実務的な建設・資金・営農・警備等の計画立案について指導を受け、また、しばしば先達開拓団を訪ね、研修を積んだ。

この訓練期間中、団長矢野武吉は、ふとした縁で、講師人の中の二人の県出身者の知遇を得ることになり、これが後に入植地決定に大きく影響することになった。

また、二人の郷土出身の義勇隊員、高橋正道(中野村)三浦悦巳(切畑村)と出会い、その身振を移籍させて、本部要員として同行することになった。

一方、基幹先遣隊員達日、第一次弥栄村の基幹訓練所で、先輩達について、建設・営農に関する実技を学び、また、火の人達は、特に専門の訓練を受けている。

柳井 光 本部要員として、参理。

三浦 一。畜産、とくに養豚。

高島藤太郎。畜産、とくに馬。

大友菊次郎。農産加工、とくに醸造。

清田光之。給養、炊飯
児玉 環。自動車運転
訓練の期間中、幹部三名は、一度弥栄村の現地に隊員を訪ね、激励し合っている。

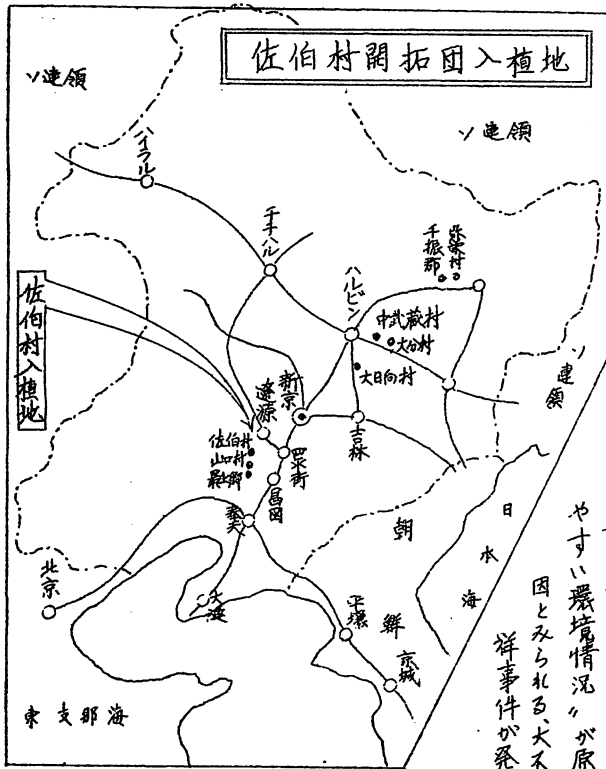
(入植地の決定)

昭和十五年も終りに近づいた頃、第十次開拓団の入植地が全面的に決定し公表された。それによると、佐伯開拓団の入植地は、南満州、四平の穀倉地帯の一角で、転業移民受け入れのため準備した、既耕地域の一つということであった。これは、元千振郷開拓団長、当時の青年義勇隊副訓練所長宗光彦(近く満拓理事となること)が決定していた)、満州国政府開拓総局招墾延長高倉正、兩名の異例の配慮によるものであった。

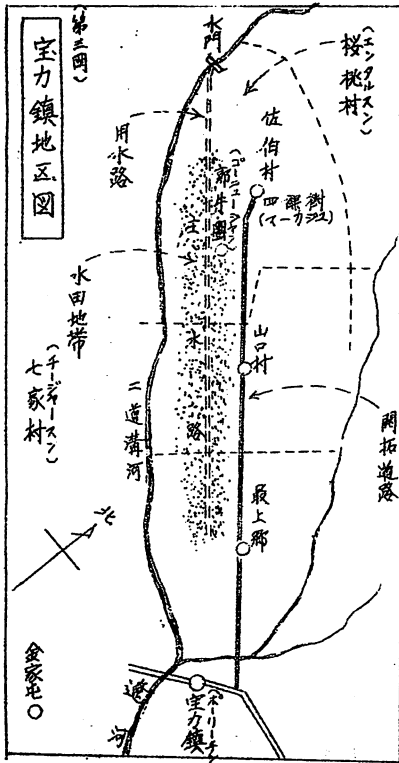
もともと満州農業移民の入植は、その出発の歴史からして、関東軍の対ソ軍事作戦に備える、後方兵站の確保を狙いとする面が強かったから、その配置は、一たん有事の際、攻撃正面と予想される東満州の、鉄道沿線地帯に集中しており、当時、南満州には、いくばくの開拓団も存在しなかったのである。

しかし、支那事変の長期化により、日本内地の食糧事情が悪化するとともに、軍需産業重点に企業整備が強行された結果、都市商工業者の転業が続き、これ等の入植を転業移民として受け入れる必要から、狭義の軍事的要請を離れて東滿以外にも、広く食糧増産の適地(米を主体とした)を求めて、その入植を進める方針が採用され、転業開拓民でもない佐伯開拓団にも、特別に、南滿のこの地が割り当てられたのであった。

入植が決まると、団長は二人の指導員と、先遣隊長北山武雄を連れ、隣接して入植する他の二つの開拓団(山



口・最上)の幹部と共に、現地踏査に出掛けていった。
 (十二月の後半であったと記録されている。)
 入植地として決った地は、奉天省(後に分離して四平省)昌図県宝力鎮地区(詳しくは佐伯開拓団は櫻桃村)で、ここは中国東北最大級の都市奉天(現在の瀋陽)と、満州國の首都新京(現在の長春)のほぼ中間、交通上の要衝四平街と、この地区最大の穀物集散地遼源の少しく南方にあり、鉄道駅昌図から、西北五十二キロの地点にあった。駅から県城までは十キロで、ここは県公署や、日系の病院があった。県城の郊外、満川村の台地には、かつての東北大軍閥の雄、張学良の軍営跡があり、満蒙開拓青少年義勇隊の特別訓練所があった。
 (ここには、さきほど幹部送考のところでふれた、開拓特有の人間関係を傷つたやすい環境状況が原因とみられる、大不祥事件が起



昌図を出ると、宝力鎮までは、七キロ幅の警備道路が一直線に通じ、その距離はおおよそ三十キロであった。宝力鎮は、遼河の支流が合して作る三角点の要の位置にあり、二、三十戸の現地人商店と、警察署・郵便局などがあり、少数の日本人が住んでいた。
 入植予定地はこの街の北側、河一つ越えたところから始まっており、東西約六キロ、南北約二十キロで、細長



生している。それは昭和十四年五月五日、連盟会の得点のいさかいから、平素の抑圧された不満が爆発し、相対する二つの中隊が、弾薬庫を襲い、突撃ラッパを鳴らし、展開する事態に発展し、多数の死傷者を出した。ついに関東軍が出動し、その強圧でかろうじて終息したが、部外への公表は固く禁止されていた。
 展開する事態に発展し、多数の死傷者を出した。ついに関東軍が出動し、その強圧でかろうじて終息したが、部外への公表は固く禁止されていた。

いざつまいもの形をしており、中央を幅十五尺の開拓道
路が縦貫し、その東側は全面的に畑地で、西側、二道溝
河との間の低地が開田予定地であつてられ、その中ほどを
五道中の主水路が開拓道路と並行して、南下していた。

佐伯村開拓団は、この地区を東西に三分した、その一
番北側に入ることはなつていた。(地國参照)そこは宝り鎮
から更に十格以上も離れ、交通上、不利を免がれなかつたが、ここは水路の上流であり、稲作・水利の面で断
然優位にあり、また、開拓道路が将来、佐伯地区から遼
源に抜ける計画であつたから、その場合は、むしろ、こ
こが新たな玄関口にされるという期待があつた。なお、
山口村開拓団は中央部に、最上郷開拓団は南部にそれぞれ
水入植が決つていた。

入植地は、すでに満州開拓公社の手で買収を終えてい
た。他の地区の資料によれば、買収価格は、畑一町歩八
十町程度という。強奪にひとしい価格である。しかしこ
の地が同様であつたかどうかは分らない。

この地区の開田予定地域は、もともとアルカリ性の強
い土壌(洪水で溢れた水が、流れ去ることなく蒸発を繰
り返してきたため)で、これを耕地にするには、遼河の
水を導入して灌漑する以外に方法がなかつたが、地区の
農民には、水利の技術がなく、長い間、未墾のまま放置
されていた。

それを満州開拓公社が買収し、満州土地開発株式会社
に委託して、上流に堰堤を築き、巨大な水路を開いて、
灌漑工事を進めたのである。工事には多数の朝鮮人労務
者が使用された。多分強制徴用されていたものと思われ
る。現地調査の時点では、水路工事は大部分終了してお
り、代つて入つた朝鮮人農家が、試験的な稲作を実施し
ていた。

畑地は入植者の増加に合わせて、引き渡されることになつてはいたが、畑とともに、既設の現地人家屋の買収が行なわれていたのは、期待外のことであつた。

これは入植の初期、住宅・倉庫等の建設に、資材・労力を奪われることなく、直ちに営農に取り組めることを意味し、建設を進める上で非常に有利であつた。その上、踏査の期間中、予想以上に寒気が厳しくなかつた。現地住民の語では、冬期はマイナス八度前後の日が多く、十五度と下廻るような日は稀とのことであつた。

現地踏査の結果、初期の建設計画は、好ましい修正を加える必要が生じ、関係機関と打合せのため、団長は、一時内地に帰つた。

五、初期の建設計画

現地踏査を終えた時点で作製された、佐伯開拓団の初期の建設計画が、当時の『中野村報』に、概略的に載せられてある。前後二回に分れているが、地誌的な紹介であつたと思おれる前の部分は、残されていない。できるだけ原文に近く紹介する。

○ 第十次昌図佐伯開拓団建設計画

一、組織

隣保班を組織し(四〜八戸)班長を設け、団の最小自治体とし、その上に部落を設け、部落会を組織して、会長が団長の命を受け、部落経営を行なう。

二、共同委員会

最上郷・山口村等と事情を同じくしている関係上、将来、水利・文化等の施設の共同設置、及び運営のため、機関として、共同委員会を設置する。

組織は、各団の幹部・昌図県の副県長(日本人)開拓

股長・協和会職員・宝力鎮警察署員(日本人)等、二十名で構成し、事務所は山口村に置き、毎月十五日例会を持つ。

三、入植計画

現地踏査の結果、予想以上の好条件のため、更に百戸を追加して、その名林佐伯村を佐伯郷と改め、因如は、昌岡佐伯開拓団と決定し、三百戸の入植を実現する。

村別入植計画(次のとおり変更)

- 中野村七〇 上野村五〇 明治村三〇
- 切畑村三〇 直見村三〇 因尾村三〇
- 川原水村六〇

年次別入植計画

初年度六〇 次年度以降 毎年八〇

四、建設計画

入植初期の拠点として、郭牛團部落に置き、開拓道路の完成により、第二年度に四郷村部落に本部を建設する。既存の家屋を極力利用し、宿舍等の建設を当分見送る。

五、学農計画

- 第一年度 団の共同生活
- 第二年度 部落単位の経営
- 第三年度 隣保班経営
- 第四年度 同
- 第五年度 個人経営

六、昭和十六年度作付計画による

- 米 一〇五〇石 大豆 九〇石 小豆 一三石
- 麦 六〇石 小麦 九石 大麦 一〇石
- (以上は食糧用)
- 高粱 五二五石 包米(玉蜀黍) 五四石

- 粟 三六石 馬鈴薯 一二〇貫 ビート 一〇〇貫
- デントコン 六九貫 ルーサン 一五〇貫
- (以上 飼料用)

大麻 三貫

(以上 特用作物)

蔬菜は、内地同様多種にわたっている。(品種のみ掲げる。)

- 大根 赤大根 青大根 人参 ごぼう 甘藍 白菜
- 不断草 ほうれん草 そば ねぎ トマト 豆す
- 南瓜 西瓜 まくわ きゅうり えんどう なたね

六、畜産計画

本地区は、採草地に乏しいため、一戸当り一町歩以上の豆科牧草を輪作し、地力の維持を図ると共に家畜の飼料に充て、将来は、一戸当り役馬二頭、乳牛二頭の大家畜と、自給程度のみん羊、兎、鶏を飼育せしめ、特別に豚の多数飼育により、副業収入に充てる。

本年度計画

- 馬 二〇 日本馬 三五 豚 一一
- めん羊 一〇 兎 一〇 山羊 三
- 鶏 一〇〇

(正 誤)

第一四文中(コウニツ)上段最終行、黒龍省は黒龍江省、第二四文中(ミート)上段十二行、加藤寛治は加藤完治。

(16ページ下段、終りよりのつづき)

盛衰と、豊後大友氏の興起が大きな関連をもっていることが注目され、宇佐氏との抗争に敗れた大神氏の一族が、豊後に入り宇佐領荘園を足がかりに勢力を扶植し、武士化したかではないかと見られている。

(つづく)